

# 令和2年度けやき幼稚園学校評価 (R2年度末作成) 公表シート

～本園の教育の理解のために～

## I 教育目標と教育方針

**目標** : 武蔵野の土と緑のなかにあつて、自然に親しみ、明るく健康で質実な精神を養う

**方針** : 少人数による家庭的な手作りの保育を行なう  
・のびのびと遊ぶこと、規律を守ることの両立による集団生活を営む  
・早期の知育に偏らず、人間関係の基礎を学ぶ場として多様な経験をさせる  
・保護者との良好な信頼関係を築き、家庭と手を携えて園児の生活と安全を守る

### 解説:

本園はちいさな幼稚園である。小さいからこそできる、一人一人を見つめる家庭的な手作りの保育を行なうことを全教職員の共通理解の根底に置く。大きなけやきの木の下で、のびのびと、かつ規律を守って過ごす毎日が、子どもの心と体の両面に確かな力をはぐくむことを信じ、子ども自らの育つ力を引き出すこと、仲間同士育ち合っていく姿を援助することを旨として、教育内容を検討し、日々実践していく。

上記の目標は、創立時の建学の精神を掲げたものである。子どもの育ちには自然が欠かせない、教育は田園の中で寺子屋のように行ないたいと、この武蔵野の地に武蔵野学園を設立した創立者の理想を汲んでいる。時代は流れ、今では田園ではなく住宅街の一角になったが、できるだけ、戸外で遊ばせ、緑と土に親しませたいと考える。そして、少人数で仲間とも先生たちとも家族的に触れ合い、一人一人がその一員として大切にされながら、他の子や園のためにも役立っているという自覚が持てるようにしていきたい。そのためには、昔の原っぱでのわんぱく集団のような異年齢での交流も有益と考える。

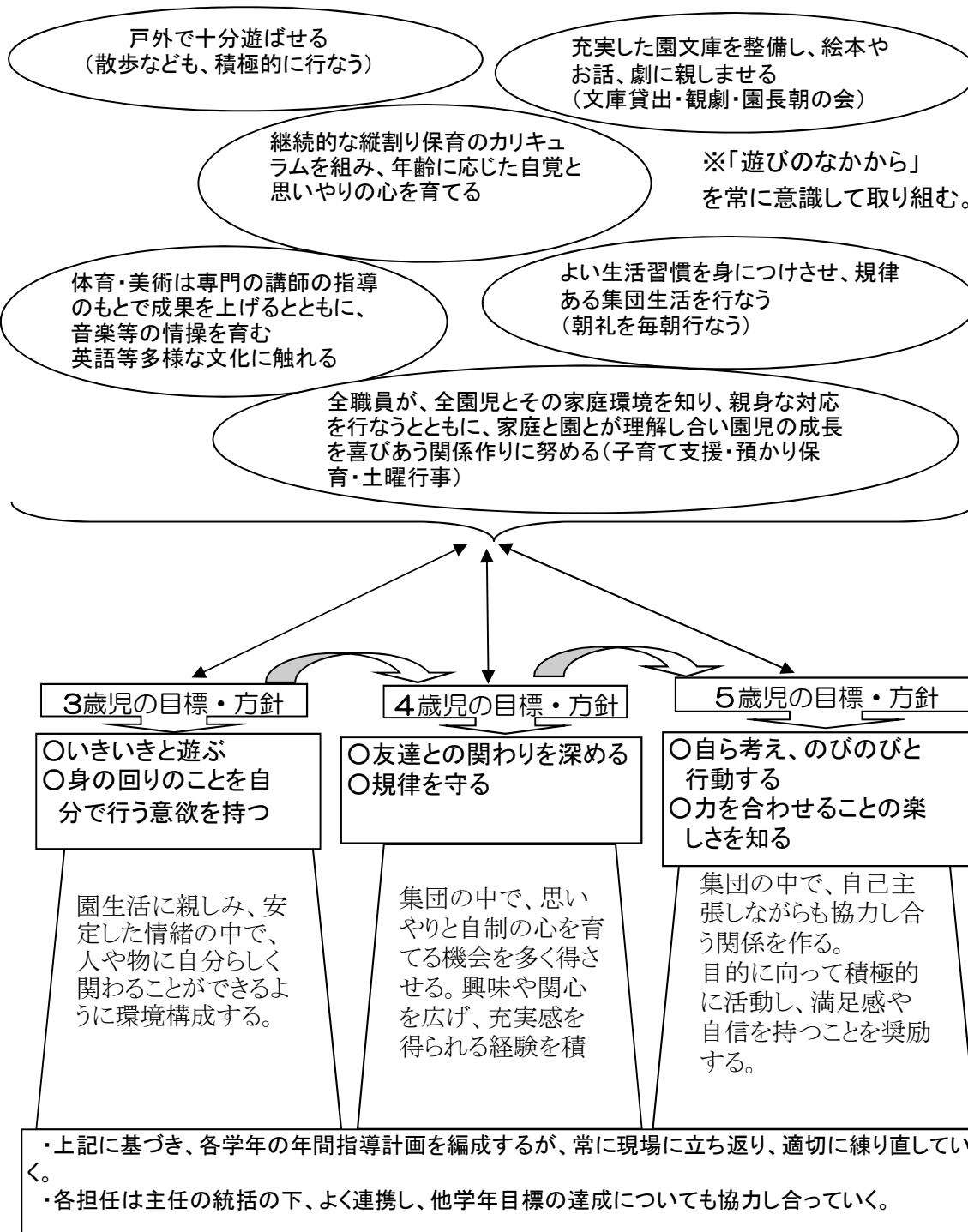
質実な精神とは、与えられるばかりでなく、与えることの豊かさを知ることでもある。お話や絵本で豊かな心を育て、体育や美術や音楽で心を解き放ち、様々な自己表現の機会を得させる。早期の知育に偏ることなく、基本的な生活習慣と、規律ある生活を尊び、自分のことは自分でする意欲を引き出す。愛情と安心の感じられる環境の中で、人との関わりを濃密にし、きちんと自己主張していくことで、同時に思いやりの心も育つ。

こうした教育を実りあるものにするためには、園とご家庭が信頼関係で結ばれ、お互いに感謝の心を持ち合うことが必要である。そして、園が家庭的であるためには、その一員として保護者同士も「おたがいさま、ありがとう」の心で、子どもたちが育ち合う姿を見守る態度がなくてはならない。送迎時や、土曜行事日など、保護者と担任や他の教職員とがコミュニケーションをとる機会を多く設け、有意義に活用していきたい。また親同士が知り合い、子どもの育成に力を合わせることが、温かい雰囲気の中での家庭的な保育の実現につながると考える。

## II 本年度、重点的に取り組む目標・計画

行政における幼稚園・保育所等の大幅な改編の時代において、幼稚園教育の意義と役割を再確認し、安全かつ子どもにとっての最善の利益となる教育の質の向上を図る。

## 特色(重点事項～教育目標・方針の実現・実践のために)・学年別目標と方針



### Ⅲ 評価項目の達成および取り組み状況

評価項目	取組状況
安全管理と保育の質の維持	職員はコロナ感染対策を始め、感染症全般への理解と対応能力を高める(感染症・AED・事例検討等の園内研修)と同時に行く先を変更しても宿泊保育を実現させたり、時間を短縮しても学年合同の運動会を実施したりと、質を落とさぬ工夫を随所で行なった。文庫貸出回数や冊数も増やすようにした。
教職員間の連携を良くし縦割り保育の成果を上げる	毎月の縦割り保育日以外にもチーム保育の充実を図るが、コロナ禍により学年別の登園も余儀なくされる中、全職員は担任だけに任せず、協力し合って消毒等の雑務も含め、真剣に取り組んだ。
ICT教育環境の構築について推進を検討する	園外研修が難しい中、後期には職員用のパソコンを導入し、オンライン研修も可能な環境を整える。ただし、保育への直接の利用は、実際の触れ合いをむしろ重視すべき時と考えて、手書きや電話や手作りキットの配布などを優先した。

### Ⅳ 総合的な評価の結果

令和元年度の自己評価を踏まえて設定した評価項目であったが、一学期か夏休み中に収まるかと思われたコロナの感染拡大により、日々の対応に追われた感は否めなかった。その代り、各保育内容を見直し、真髓を活かすべく工夫を重ねたことは有意義な面もあった。また、改めて家庭教育の意義、幼稚園教育の意義が問い直されるべきであると感じられた。保護者との信頼関係が崩れずに維持できたことは何よりであった。一方、臨時休園や長期休暇中の休みも教職員には十分休養を取り、自宅での研修も推奨したが、コロナ禍に大事な命を預かるという緊張感は大であり、精神的な消耗には留意すべきである。

### Ⅴ 今後取り組むべき課題

課題	取り組み方法
安全管理と保育の質の維持・生きる力を育むための教育	生後間もなくのコロナ禍の中で様々な経験不足の子どもたちが増えている。入園当初からの丁寧な保育がより一層求められる。生きる力を育むためには周囲との信頼関係が必要。家庭教育、家族の絆の大切さを「育児が楽しい」と思えるように園から発信していきたい。園文庫の活用や、視覚的な情報を増やす工夫、安全に扱える楽器類の拡充などの教材研究に加え、縦割り保育も含め子ども同士が育ちあう姿を大切に、教職員の意識を高く保ち、研鑽を重ねていく。緊急メールやホームページの活用を幅を広げていくが、機器の導入によるICT教育環境の構築は幼児という対象の特性を鑑みつつ慎重に進めていく。

### Ⅵ 学校関係者の評価

コロナ禍による保育時間の制限のかかる中で、日常の保育や行事のねらいを吟味し、分散縮小しながらも教育週数を確保して園の教育目標を達成した。理解ある保護者の協力に支えられ、激動の一年を乗り切ったことを評価する。